

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	令和元年度「教職課程担当教員養成プログラム」活動報告
Author(s)	松田, 充
Citation	教職課程担当教員養成プログラム報告書, 令和元年度 : 1 - 4
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048963
Right	
Relation	



令和元年度「教職課程担当教員養成プログラム」活動報告

松田 充 (広島大学)

はじめに

広島大学大学院教育学研究科教育学習科学専攻（教育人間科学専攻（博士課程後期）は、平成19年9月から平成22年3月にかけて、「Ed.D型大学院プログラムの開発と実践～教職課程担当教員の組織的養成～」(平成19年度文部科学省大学院教育改革支援プログラム)に取り組んだ。同プログラムでは、①確かな研究力に加え、大学教育において実践的な指導力を発揮できる人材、②高等教育を含む教育臨床に的確に対応できる人材、の育成が目指された。同プログラムは、将来、教職課程を担当する大学教員、すなわち「先生の先生」を組織的に養成しようとするものであり、これまで研究者養成に特化してきた大学院教育の在り方を見直すものでもあった。

以上の目的を引き継いで、同プログラムは平成22年度から「教職課程担当教員養成プログラム」(以下、教職P)として実施されている。本章では、本年度の活動を、正規教育課程に関する部分を中心に概述する。

1. 教員養成学講究・大学教授学講究

(1) 教員養成学講究

教員養成学講究では、教員養成の歴史・制度を学ぶとともに、「教職科目」のシラバス分析を積み重ね、最終的に履修生がオリジナルのシラバスを1科目分作成する。それぞれの取り組んだ科目は下表に示すとおりである。

表A 教員養成学講究取り組み内容

履修院生	シラバス作成科目	シラバス分析科目
A	道徳教育指導法	千葉大学 教職概論1
B	教育と社会・制度	東京大学／教職論 京都大学／教職教育論 千葉大学／教職概論 東京学芸大学／教職入門
C	教職入門	東京大学／教職論 京都大学／教職教育論 千葉大学／教職概論 東京学芸大学／教職入門

(2) 大学教授学講究

履修一年目の後学期に開講される大学教授学講究においては、大学教育ならびに講義・演習等の教授行為に関する探究課題を院生自らが設定し、調査・研究内容を発表する演習が行われている。

表 B 大学教授学講究取り組み内容

履修院生	レポートタイトル
A	高等教育における LMS の活用に関する一考察 —LMS を用いた授業を手掛かりに—
B	モンゴル国における教員研修に関する研究 —新人教員のインタビューを中心に—
C	J.ロックランの「モデリング」理論

2. 教職授業プラクティカム

「教職授業プラクティカム」は、履修生が TA として講義・演習等に入りながら、最終的に1回のコマを担当する「教壇実習」をメインとした科目である。教育の補助者から仕手へと立場を変え、慣れない“責任ある”教育実践者としての立ち回りを要求される。プログラム履修2年次において広島大学開講科目で前後期にそれぞれ1回、3年次には他大学で1回の計3回教壇に立つ。

加えて、事前に授業検討会を設けて、1時間程度はその指導計画案について吟味する（事前検討会）。検討会には授業提供教員と TA 指導教員（一般的にメンター教員あるいはファシリテーターと解される存在）、他のプログラム履修院生が参加し、授業の目的や資料の適切性、時間配分、なぜその教育方法を採用するのか、などが話し合われる。履修生は教壇実習当日までに、検討会で指摘された事項をもとに、指導案を修正することになる。下表は本年度に実施した教壇実習の一覧であるから、参照されたい。

教壇実習を終えた履修生は、事前検討会と同様のメンバーとテーブルを囲み、実施後の授業検討会を行なう（事後検討会）。自身の実習についての振り返りを行ない、次の実習に活かす。

表 C プラクティカム日程一覧

	No.	実習実施日	実習院生	授業名	題材・内容
前期	1	6月14日	E	教育社会学演習	教育社会学の研究方法論
	2	6月20日	H	教育方法の研究※	教育課程の編成と授業づくり
	3	7月9日	F	生徒指導概論※	学級崩壊の予防と再生 —無反応学級の子どもの指導の視点—
	4	7月12日	J	道徳教育論※	道徳科授業の作成—教材研究、学習指導案
	5	7月22日	D	教育課程論	教育課程とその編成の意義
後期	6	12月10日	I	教育実習※	園庭での保育を振り返ろう

	7	12月17日	G	教師・保育者論※	教師・保育者は現場でどう成長するか？ —反省（省察）的実践家としての教師・保育者—
	8	1月7日	E	教育社会学	学生の「生徒化」と大学の「学校化」
	9	1月23日	D	教育方法学	子どもの権利と教育的関係

※広島大学以外で実施（履修3年目で行うプラクティカムⅢ）

3. 教職教育ポートフォリオ

3年間の取り組みは、授業理念の形成によって締めくくられる。授業理念そのものは履修のどの年次からでも抱いておき、各々で磨いていくべきだが、それをまとめた文章にする機会として「教職教育ポートフォリオ」の作成が課せられている。

ポートフォリオの授業では担当教員の導きを頼りに、授業理念（あるいはティーチング・フィロソフィー、教授哲学と表記する者のいる）を推敲し、完成させていく。また、理念を記すにあたってエビデンスとなる成果物を、ポートフォリオに整理して蓄積する。教職課程担当教員養成としてどうありたいか、そのためにどういったことを意識するべきか、自分の学んできたことはどう生かせるのか、これらが主要な記述内容となっている。

令和元年度は5名のポートフォリオ提出者があり、無事修了証書を授与された。彼らの記した教授哲学・授業理念の中心点のみ、下に引いておく。

私は、博士課程後期の3年間の教職課程担当教員養成プログラムを通して、どのような教師を育てたいかを明確にするために、これまでの教職Pで取り組んだ資料を振り返ってみたところ、私は「考える」ということをキーワードにしていた。（中略）私は「考える」という営みを習慣化し、自分の抱く疑問や謎を求めながら実践する教師を育てたいと考えていたと改めて思う。

—履修院生 F—

これらのメッセージから浮かびあげるのは、自身の教育実践に責任をもち、多様な視点から地震の教師としての存在理由を問い直し、確立していく教師—このような教師を私は熟慮する教師と呼びたい—を要請するという私の教師教育観である。

—履修院生 G—

探究と発信を自らの実践の中でなそうとする「学問する教師」を私は育てたい。

「学問する教師」とは、単に磨かれた専門的な知識と技能を有する教師のことでなく、教育・授業・学校に関わる固有な問いをもって探究し、実践を通してその問いを問題提起し新たな価値を生み出していくことのできる教師である。19世紀新人文主義を研究対象としてきた私にとって、教師は自らが「世界の美的表現」をしなくてはならない、すなわち自己規定に即した大きな問いに行き、その問いに生きているさまを実践の中に「刻印」し、世界に発信していく教師像だといえる。

保育者養成課程において、学生にどのような保育者となってほしいか。社会的要請による単なる人手不足の解消ではなく、子育てとは異なる保育の社会的役割や保育者の専門性を理解し、一人の専門家として子どもの生活を支える存在に育ってほしいと考える。(中略)

インタビューを踏まえて改めて考えても、保育者養成課程で最も保障しなければならないのは、保育の専門家としての保育者養成である。なぜなら、資格・免許状を取得したすべての学生が保育職に就く可能性はある。実習生ではあるが保育者として子どもの前に立つ可能性もある。学生の進路の選択肢を広く捉えつつも、子どもにとって大事な時期にかかわる可能性のある学生、一定程度の専門知識を身につけつつ、保育実践における物事を複数の視点から考えられるような授業をしたい。

おわりに

これまで述べてきたような教職 P の実践は、様々な方の支援があつてこそ行なえるものである。末筆ながら、運営に携わって下さった教職員の皆様、学外プラクティカムを受け入れていただいた山口大学の熊井将太先生、福岡教育大学の樋口裕介先生、広島文教大学の白石崇人先生、広島文化学園短期大学の黒木貴人先生、広島文化学園大学の坂越正樹先生、そして共同研究を進めるにあたりご協力いただいた先生方・教職科目の履修生各位、運営の補助にあたった院生諸氏、そのほか多くの方々に心より感謝申し上げたい。

注

1) 具体的には、3年間通じて次の教育課程を経る。博士課程後期1年次生は、前後学期を通じて、2つの授業(「教員養成学講究」と「大学教授学講究」)を履修し、教員養成制度の歴史や大学での教授法を学ぶ。博士課程後期2年次生は、学内(広島大学)で前学期・後学期各1回、計2回の教壇実習に取り組み、博士課程後期3年次生は、学外(他大学)において教壇実習に取り組み。

教壇実習は、履修生1名に対して、教員が2~3名(指導教員1名、教育指導を担当するTA指導教員2名)で指導にあたる。教壇実習の前後には、実習生が作成した指導案および授業の構想について議論をする事前検討会と、実習生が実施した授業について議論をする事後検討会が開かれる。指導案や授業をもとに議論をする中で、専門が異なる教員や履修生の授業についての考え方や授業の見方に触れることで、多角的な授業改善が促進される場として設定されている。事前検討会、事後検討会の後、履修生は授業の再構成、リフレクションを行なう。

博士課程後期3年次生は、教職Pの総仕上げとして、「教職教育ポートフォリオ」を作成する。プログラムを履修する中で、自分が何を学んだのかを振り返り、自身の「授業哲学(授業理念・教授哲学とも)」をまとめる。彼らには「修了証書」が授与され、2019年度までに21名の修了生が誕生した。